

昭和9年のパラマウント映画『不思議の国のアリス』

Alice in Wonderland: a Paramount film released in Japan

木下信一

Shinichi KINOSHITA

はじめに

キャロル生誕百年祭がアメリカ・コロンビア大学で行われた翌年にあたる1933年、パラマウント社は『不思議の国のアリス』を映画化し、クリスマスにあわせてアメリカ国内で公開した。この映画は当時のオールスターキャストで撮影されていたが、現在、往年の名画のレパートリーに取り入れられることもなく、後のディズニー映画のようにビデオ・ソフト等で容易に観ることもできない。存在のみ有名で、実際には忘れられた映画となっている。

しかしこの映画はアメリカで公開された翌年、すでに日本において『不思議の国のアリス』との題で、字幕スーパー付きで封切りされていた。ここでは、映画雑誌等でこの映画がどのように取り上げられていたかを見てゆくことで、当時、この映画がどのような形で受け入れられていたかを見てゆきたい。その中で、原作である『不思議の国のアリス』がどう読まれていたか、また、一見、忘れ去られたように見えるこの映画が、原作である『不思議の国のアリス』翻訳史にどのような影響を与えたかについても考察したい。

映画『不思議の国のアリス』

最初に、パラマウントが制作した映画『不思議の国のアリス』について、簡単に紹介しよう。

話の筋は『不思議の国のアリス』と『鏡の国のアリス』とを一つにまとめたものである。時期は冬、アリスと家庭教師の会話のシーンで始まり、アリスが部屋にあるチェスの駒や、窓の外で雪の中を走っている白兔を見たりしている。そのうち眠り込んだアリスを見て家庭教師が部屋を出て行く。そのドアの音で目を覚ましたアリスが鏡の向こうに興味を持ち、暖炉の上へ上って鏡の中へ入り込み……、と『鏡の国のアリス』の設定で話が始まる。鏡を抜けると部屋に掛かっている絵の人物が後ろを向いていて（表の世界では正面を向いている）、アリスに気づいて振り返り、アリスと話す、といった場面のあと、暖炉のそばのチェスの駒のシーンになる。その後『鏡の国のアリス』と同じく宙に浮かんで階段を下り、家の外へ出たところで慌てふためいている白兔を見て、兔穴へ飛び込む、というところから『不思議の国のアリス』のストーリーとなる。原作をかなり端折った形で海亀フーの話まで行き、グリフォンに連れられてアリスが走っているうちグリフォンが赤の女王に変わって『鏡の国』が始まる。同じく『鏡の国のアリス』の原作を駆け足で見せながら最後の「女王アリス」のパーティの乱痴気騒ぎがあり、アリスは夢から覚める。『鏡の国のアリス』

の原作と違い、猫はダイナしか出てこない（だから赤の女王もダイナ）。また、アリスの年齢も「12歳と4ヶ月」とされている。

現在のようなスペシャルメイクの技術がない中で、忠実にテニエルのイラストを再現しようと努力している。動物たちは多くの映画のように役者の顔を出すことはない（そのため、海亀フーを演じるケイリー・グラントも顔が全く出てこない）。「女王アリス」のパーティでは『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』の両方の登場人物が出てくるが、乱痴気騒ぎの所ではマトンやプディングとの会話、あるいはろうそくが伸びたり、白の女王がスープに沈んだりと驚くほど忠実に原作が再現されている。

こまかな部分で原作を映像向きにした工夫があり（「私を飲んで」という瓶だが、ラベルには「私を飲んで」以外に「毒にあらず」と書かれている、帽子屋の持っている時計は短針が月、長針が日を表すようになっている、トゥードルダムたちの話す「セイウチと大工」のシーンでは紙芝居を掲げると、中でセイウチと大工の話がアニメーションになっている、等）、現在から見ても、白黒であるという点を除けば十分に鑑賞に堪える作品となっている。

冒頭、『不思議の国のアリス』の舞台となる夏ではなく、『鏡の国のアリス』の時期である冬を持ってきた理由は、おそらくこの映画がクリスマスに公開されたことによるものと思われる。

字幕翻訳者・清水俊二

この映画がアメリカで公開されたのは1933年（昭和8年）のクリスマスであるが、日本では翌年、昭和9年の3月に松竹洋画の配給で封切りされている。封切館は、当時は映画館の大阪松竹座であった。そして、この映画は、国内で翻訳字幕をつけた、最初期の映画でもあった。

日本における翻訳字幕付きの映画は、昭和6年2月11日封切りのパラマウント映画『モロッコ』をもって、その嚆矢とする。昭和6年の時点では翻訳字幕のある映画はパラマウント社の映画だけであったが¹、昭和9年の時点ではすでに他社の映画でも、翻訳字幕付きの映画は公開されていた。だが、これらの映画は、パラマウント社を含め、本国で日本語翻訳字幕を作成し、日本へ送られてきていたのだ。『不思議の国のアリス』が公開される前年の昭和8年から、パラマウントでは、日本語翻訳字幕を日本において作成するようになる。『不思議の国のアリス』の字幕翻訳を行ったのは、後に文芸翻訳でも名をなす清水俊二（1906～1988）であった。

清水は、昭和4年にワーナー・ブラザーズに、当時宣伝部長だった榎原茂二（長谷川修二）に誘われて入社、翌年MGMに移ってトーキー台本の翻訳を行っていたが、昭和6年10月、田村幸彦に誘われ、この年から日本で公開される全作品に翻訳字幕を入れることになったパラマウントに移った²。清水は、パラマウント映画ニューヨーク本社にて日本語字幕翻訳の仕事をするために渡米している。その後、日本国内で字幕翻訳を行うために昭和8

年5月に帰国、パラマウント日本支社に改めて就職した³。

当時の日本には検閲制度があったため、アメリカから送られてきた台本をもとに検閲用の台本が作られた。これには原文とその全訳が対訳で記載される。検閲台本の中にはすべての科白を収録するのは当然として、街の雑音や銃声、犬の声なども記載する必要があった。そして、この全訳とともに字幕スーパーも書き入れる必要があった。検閲台本は横書き、左ページに英文、右ページは左から三分の二のところまでページを左右に分け、三分の二のスペースを科白の全訳、三分の一の部分に字幕を書き入れていた⁴。つまり、検閲台本を読めば科白の全訳とともに当時の『不思議の國のアリス』の字幕スーパーの内容も判明するのだが、現時点では清水の翻訳がどういったものであったかは推測によるしかない。

とはいえ、大まかな特徴は想像がつく。当時の字幕は、一般に字幕の数が少なく、字数が長かった。字幕の数を少なくしようというのが当時の考え方だったのだ⁵。『不思議の國のアリス』もこれと同様に長い字幕、字幕の数が少ないということは確かだろう。また、映画『不思議の國のアリス』にも、原作同様に言葉遊びが出てくるが、清水はどう扱ったであろうか。英語の洒落をどう字幕に反映するか、清水が昭和10年に『映画と演藝』で自分の訳した字幕についてエッセイを書いている。ここでは、そのエッセイを後に回想した記事から、清水の翻訳ぶりを見てみよう。映画の題は『カレッジ・リズム』。この中の科白で、“I hate you! I hate you! I hate you!” “Three hates makes twenty-four.”という部分がある。清水はこれを「罰当たり！ 罰当たり！ 罰当たり！」 「三罰二十四や」と訳している⁶。但し、じっくり読むことの出来る本とは違い、映画字幕はすぐに流れてゆく。それゆえ清水は

とにかく、語呂合わせになっている。だが、『カレッジ・リズム』が映画館にかかったとき、この字幕が観客を笑わせたとは思えない。笑った観客がいたとしてもほんの数人で、その数人のなかの何人かは hate と eight の英語の語呂合わせがわかったひともかもしれない。語呂合わせのおもしろさはことばがしゃべられるからで、字を読まされたのでは語呂合わせにならない⁷。

と、付け加えるのを忘れない。しかし、こういった清水の姿勢から、映画『不思議の國のアリス』では、英語の言葉遊びも極力日本語字幕に反映されていたであろうとは推測される。

映画評論家・清水俊二

『不思議の國のアリス』封切り当時の清水は、字幕翻訳を行うと同時に洋画の紹介を雑誌にも寄稿していた。『不思議の國のアリス』についても清水は雑誌に紹介記事を書いている（「春の大作紹介 不思議の國のアリス」『新映画』昭和9年3月号）。ここで清水は『アリス』物語が英米の子供たちには聖書の次に読まれていること、テニエルの挿絵のことな

どを紹介した後、キャロルの紹介や Golden Afternoon についても紹介している。加えて自身がニューヨークにいた昭和 7 年にアリス・ハーグリーブズが渡米した話を紹介しているが、記事の中でもっとも重要なのはアリス渡米の年にブロードウェイで上演されていた Eva Le Gallienne の演出によるミュージカル『不思議の国のアリス』と映画との比較を行っていることだ。アリス・ハーグリーブズについては、『アリス』物語のもととなった Golden Afternoon について紹介をした後、以下のように書かれている。

ダッチスは死んでしまつたけれど、アリス・リデルはまだ生きてゐる。昨年春、彼女が紐育に来たとき、僕も紐育にゐたので、新聞で寫眞を見たが、品のいいまるまると太つた婆さんであつた⁸。

この清水の文は、アリス・ハーグリーブズ渡米について書かれた、同時代の日本人の証言として貴重なものであろう。ミュージカルとの比較については、清水は次のように語る。

僕は一九三二年の十二月に紐育で上演されたイヴァ・ル・ギャリアンヌの『不思議の国のアリス』を見た⁹。

ギャリアンヌと、門下のフロリダ・フリーバスとが苦力して脚色したものであるが、映畫に脚色したジョセフマンキウヰツとウヰリアムキャメロン・メンジスも芝居の脚色を踏襲してゐる¹⁰。

そして、原作（『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』）の各章とミュージカルの各場面について比較を行い、その後ミュージカルと映画との比較を行っている。

映畫の脚色は、前述の通り、芝居の脇本を殆どそのまま書き直してゐる¹¹

映画『不思議の国のアリス』は、その字幕翻訳に最適の人材を得たといえるであろう。また、この清水の記事では、後の日本でもよく知られる『アリス』のフロイト的解釈についても、すでに紹介している。

まったく、『不思議の国のアリス』を一讀して、これは精神病者が書いたのではないかと言つた人があるのも無理はない。フロイトの精神分析などで『不思議の国のアリス』を分析したならば、必ず面白い結果が現はれるだらうと思ふ¹²。

この清水の記事の出る前年、『アリス』物語をフロイト風に解釈する *Alice in Wonderland Psychoanalysed* が発表されているが、清水が読んでいたとは考えられない。後述するよう

に、他の人間も映画『不思議の国のアリス』の紹介記事でフロイトについて言及されており、フロイト風解釈が一種流行であったとも思える。

しかし、清水本人は原書を読んではおらず、楠山正雄の翻訳を読んだだけであることを告白している。

かんじんの原著リュイス・キャロルの『不思議の国のアリス』は読んでゐない。ただ、楠山正雄氏譯の邦譯で讀んだだけである¹³。

原作の紹介とともに清水は、『不思議の国のアリス』が日本ではほとんど読まれていないことも述べている。

英國の子供は聖書の次に『不思議の国のアリス』を讀むといはれてゐる。……だから、歐米人は、芝居を見ないうちから、出場人物も事件も物語もことごとく知つてゐる。……しかし、日本人に對してはその狙いは當らない。『不思議の国のアリス』は日本ではそんなに讀まれてゐない。日本人の多くはまつたくの白紙で映畫に向ふわけである。……それほど有名な『不思議の国のアリス』と（原文ママ）いつたいどんな本か。これは當然起つてくる疑問だ¹⁴。（文中の「……」部分は、引用者による省略）

だから、くれぐれも原作を讀まれんことをおすすめしたいのである¹⁵。

以上のように、映画『不思議の国のアリス』は、字幕翻訳を行った清水本人の手によって、詳細な記事が書かれ、貴重な声が残されている。当時の日本で、原作がほとんど読まれていなかったという点は注目すべきであろう。

『キネマ旬報』での紹介

さて、次に映画専門誌として『キネマ旬報』の『不思議の国のアリス』の取り上げ方を見てみよう。

ハリウッドでの大作映画ということで、『不思議の国のアリス』は製作段階から記事になっている。

ノーマン・マクロード氏は「お伽の国のアリス」"Alice in Wonderland"の監督を始めた。アリスはシャーロット・ヘンリー嬢で¹⁶

その後も製作状況の報告がある。

前號所報の「お伽の国のアリス」にはフォード・スターリング氏、……ウィル・スタン

トン氏が役割に追加された。なほゲイリー・クーパー氏は主演せず。撮影はバート・グレノン氏である¹⁷。(文中の「……」は引用者による省略)

昭和8年11月21日号では、アリスに扮したシャーロット・ヘンリーの写真が掲載され、キャプションに「『お伽の國のアリス』で主人公のアリスを勤めます」と書かれている¹⁸。そして、翌年1月1日号では「新春特撰ポートレート集」の最初のページがアリスの扮装をしたシャーロット・ヘンリーである。2月21日号では「十二月第四週・一月第一週 紐育主要館番組及成績調査」として『不思議の國のアリス』の記載がある。

パラマウント劇場……十二月第四週はパ社映畫「不思議の國のアリス」封切とメエリー・ビッグフォードの舞臺出演とで五〇、〇〇〇弗の成績は良い¹⁹。(文中の「……」は、引用者による省略)

そして同号では「外國映画紹介」のページで、初めて『不思議の國のアリス』の解説が掲載される。ただし、この記事では筋の紹介のみであった。映画公開までは、『不思議の國のアリス』は大作として注目されていたといえる。

昭和9年1月1日号では初めて映画『不思議の國のアリス』の広告が掲載される。広告はこの号の他2月11日号、3月1日号、3月11日号、3月21日号に掲載されている。

映画評としては昭和9年3月1日号に「各社試写室より」として試写評が掲載される。ここで評者は自身が原作を読んでいないことを告白し、この映画で初めて話の内容を知ったと告白している。

不思議にも「不思議の國のアリス」だけは読んでゐない。だから、此の映畫を見てはじめて「アリス」とはこんな話なのか、と驚ろいたのである。そして原作を読んだ人達の説によると、此の映畫は原作に忠實過ぎるくらゐ忠實ださうであるから、僕はつまりリュイス・キャロルの「不思議の國のアリス」を、讀む代りに見たわけである²⁰。

評者はここで、筋立てが大人でも解らないのではないかといひ、自身解らなかつたと告白している。そして、大人には解らない以上に面白くないのではと述べる。

僕などは面白くなかつた一人である。だが子供には、解らなくとも、面白いだらう、と思はれる。これは大人の神經や、空想力にとつては、餘りにファンタスティックに過ぎるやうだが、子供の豊富な想像力には、僕たち大人が考へるよりも遙かに親密に働きかけるやうに思ふ。これを見て、考へないで、その儘受取つて、面白がることが出来るくらゐの童心を、いつまでも失なはないでゐたいものである²¹。

原作を知っている我々から読めば、これは映画の評ではなく、その後も多く見られる原作に対する評といってもおかしくない。そして、評者は、その筋立て故に、ノーマン・マクロードがこれを映画にしたことに疑念を呈している。

彼はパラマウント監督群の中でも寫實的手法を得意とする男であるだけに、この映画に於いても、題材がファンタスティックなものであるのに、リアリスティックな演出を探り、之をファンタジーとしての藝術的香氣に満たすことに於いて遺憾があつた。芸術のミュージアムとして、映画は最も現實感に富むものであることを考へたらならば、「アリス」を寫實で行くといふことは當を得てゐるとは思へない²²。

この評においても、この映画が *Eva Le Gallienne* のミュージカルを下敷きにしていることが記されている。しかし、この映画評は、必ずしも好意的なものであるとはいえない。

では、実際に封切りされた後の評はどうであろうか。4月21日号の「主要外国映画批評」のページに『不思議の國のアリス』の評がある。こちらでは、子供・大人ともに英国の風俗の差のために理解しにくく、難解であろうということ、逆に、適度の英文学の理解のある人間には面白く感じるだろうことが述べられている。映画評としてはバランスのとれたものであるといえるが、この評において注目すべきなのは興行価値についての評であろう。映画の内容の評より、評者の本音はむしろこちらにあるのでは、とも思える。

豫想してみた程では無かつた。之は主として童話映画とは言ふ物の大人にも子供にも判りにくい物が可成に含まれてゐた爲であらう。而し色々と觀客の好奇心を満足さず幻想的な場面も多く、子供達を喜ばす物も相當にはある。呼び物とすることは少しどうかと思へるが、併映作品としては悪くはない²³。

日本での封切りまでは大作として注目されていた『不思議の國のアリス』であるが、実際に封切りされてのから評は、決して好意的とはいえないものであった。

封切前後の評判

他の雑誌や新聞では、『不思議の國のアリス』はどう扱われたかを、これから見てゆきたい。ただ、ここで気をつけなければいけないのは、当時と現在との映画の上映形態の違いである。現在の映画興行では、全国の封切館で一斉に（あるいはいくらか遅れて）公開され、そのプログラムが二週間なり三週間なり続く。別の映画を觀る場合には、別の映画館へ行くことになる。一つのプログラムを上映する映画館群が並行しているのが、現在の上映形態だ。しかし、昭和9年の時期はそうではなかった。映画館では単独あるいは数本の併映を行い、それが一週間なり二週間続けば、その映画は別の映画館で上映される。併映の場合には、映画の組み合わせも変わる場合がある。そして、その映画館で一定期間上映

されれば、その映画はまた別の映画館で上映される。テレビが無く、舞台以外の娯楽といえばラジオと映画しかなかった当時としては、映画は、現在のテレビのような役割を果たしていた。それだけに、一つの映画館の番組構成は週替わりで変わってゆくということが行われていたことになる。

たとえば、松竹洋画は、おそらく配給先の映画館ごとに週刊のパンフレットとして『S.Y. ニュース』を出していた。手持ちの『S.Y. ニュース』44号（昭和9年3月29日発行）は丸の内帝國劇場で配られたものようであり、当該映画館での上映情報を掲載している。そこには3月29日から4月4日までの上映内容が『妾の弱點』『ウヰンナ藝術舞踊團』『透明人間』の三本立て、次週封切りとして『不思議の國のアリス』『真夜中の處女』の予告がある。翌週発行、丸の内邦樂座で配られたと見られる45号（昭和9年4月5日発行）では該館の番組は『モロツコの秋』『妾の弱點』『黒い砂』とあり、次週上映の映画として『不思議の國のアリス』『透明人間』の予告がある。『不思議の國のアリス』の映画評が新聞、雑誌で長期に取り上げられていたとしても、これは現在のロングラン上映とは全く性質が違うのである。

さて、その上でこの映画の評判を見てみよう。『キネマ旬報』以外の、当時の映画雑誌では、雑誌『スタア』の昭和9年2月上旬号に、この『不思議の國のアリス』のステルが掲載されている。ただし、ここではどういう訳か題が『不思議な國のアリス』とされている。近日公開の予告でもあり「花の四月、その豪華な粧ひを日本の銀幕に現しませう²⁴」とある。『スタア』は3月上旬号で「『不思議の國のアリス』が出来るまで」という題の、丸1ページの記事を掲載している。『スタア』の版型はB4版であり、通常の雑誌の2ページの分量はある記事である。この記事は原作の筋の紹介、キャロルについての説明と原作の生まれる経緯（キャロル生誕百年祭でアリス・ハーグリーブズが渡米したことも書かれている。まさにアリスの渡米はこれらの記事にとっては同時代の出来事であった）、原作と映画との比較に映画のキャスト・スタッフの紹介、映画を見るための予備知識、パラマウントが映画化権を買った裏話と、要領よくまとめられている。この中で予備知識というのは、白のクィーンや白のキング、あるいは帽子屋や三月兎が、何に依っているかを説明したものである。

「アリス」は英國の少女である。従つてその夢に現はれる人物なり動物なりが、我々日本人には全然馴染みがないものもあつて、その性格なり、言動なりを理解しにくいものがないではない。我が國で誰かが日本の「アリス」を書いてその中に、金時や、桃太郎や浦島太郎や、花咲爺や、文福茶釜等が、入り亂れて出て來たら、英國人はそれを讀んで、面喰ふに違いないのと同じ譯である²⁵。

と、『アリス』の登場人物達が英國の文化の中に出自を持つということ、日本に置き換えて説明した後に、登場人物の出自を語るのだ。予備知識を得る上で、非常によくまとま

ったガイドといえる。

そして3月下旬号では、『不思議の國のアリス』の筋を3ページにまとめた読み物を掲載している(藤浦洸「映畫による原作物語 不思議の國のアリス」)。『スタア』は、『キネマ旬報』以上に『不思議の國のアリス』を詳しく紹介している。

『映画と演藝』では、昭和9年の第11巻第1号の「外國の新作」のページでシャーロット・ヘンリーの写真とともに『鏡の中のアリス』との題で簡単な説明がある。第11巻第3号では「べすと・すりい 米國よりの大作・3月の期待」と題されたページに、「幻想と詩美 入社『不思議の國のアリス』”Alice in Wonderland”」と題された紹介記事が掲載される。しかし、この二誌には、映画公開後、記事が出ていない。

雑誌『映畫教育』では、昭和9年4月号に「誌上映畫」としてストーリーとキャスト・スタッフが紹介されている。これは紹介記事だけで、批評はされていない。

雑誌『映画評論』でも、公開前に映画評が掲載されている。この批評において、評者は原作について簡単に触れた上で「この映畫の脚色を見ると、原作よりは、大體芝居の脚色に従つてゐるやうである²⁶」と述べる(ただし、舞台版の『アリス』についての記載はどこにも見られない)。その後、映画の各場面と原作との比較が行われるのだが、評者は、英語の原文を引用するなど、原作をわざわざ原書で読んで上で批評している。また、評者はシカゴの『エデュケーショナル・スクリーン』誌に載った、この映画の評(非常に辛辣である)を紹介し、評者自身も必ずしもこの映画を成功作とは見ていない。ただ、この記事で興味深い点としては、清水の記事と同様、この記事でも『アリス』物語とフロイト風解釈について記しているのだ。

大人が論理を辿つて、この物語を讀んだら、精神病者の體驗を聞く氣持で、たゞパロディキカルな幻想が面白いと感ずるに過ぎない。全く、ある人の云ふ如く、フロイト心理學のよき材料と云はれてよい代物である²⁷。

また、原作には出てくるが映画では省略されたコーカス・レースについて述べて、以下のように記している。

アリスが、お菓子を食べて、丈が大きくなつたり、小さくなつたりした後、涙の池に落ちて、色々の動物と一緒に泳ぎ、次に、着物を何うして乾したら、良いかと相談する。ドードー鳥が、それには「歴史」がよいと云ふ。歴史は、私の知つてゐる最も無味乾燥だからと、東西共通の洒落を云ふ。又、若しもフロイト先生がゐたら、アリスはこの時、寝小便したのですかと云ふかもしれない²⁸。

昭和9年時点で、『アリス』をフロイトで解釈する方法論は、すでに日本に上陸していたのだ。

先述の清水の記事をはじめとし、雑誌解説では、多くキャロルの紹介とともに原作の紹介、Golden Afternoon についての紹介、舞台版についての記述のあることが解る。映画の評でありながらキャロルのことや原作について紹介しているという点は、清水のいうように、名前のみ知られているものの原作がほとんど読まれていないことを示している。

雑誌は上記のような状態であるが、新聞はどうであろうか。ここでは東京朝日新聞と大阪朝日新聞の縮刷版を見てみよう。

大阪朝日新聞では、昭和9年3月4日に、「不思議な國のスター」という記事で『不思議の國のアリス』への言及がある。

パラマウント映畫での「不思議な國のアリス」といふ映畫、これを最近見て感じた話。

勿論、こゝで僕は、映畫批評をするわけではないからこの綺麗なお伽噺映畫については、たゞ面白い映畫だとだけいつておく。こゝでは少し他の話である²⁹。

この記事は映画批評ではなく、映画のキャスティングについての評である。オールスター・キャストではあるが縫いぐるみのため役者の顔が見えず、そのため映画の冒頭で役者と役との写真が一緒に出される点を、オールスター・キャストであるが故のナンセンスさとして取り上げているのみである。同じく公開前の3月18日には、「映畫になったお伽噺『不思議の國のアリス』」という題で、映画の紹介が掲載されている。こちらは、筋の紹介にとどまっている。

一方、『東京朝日新聞』では、3月20日に「新映畫評」として取り上げられ、見出しこそ「子供が喜ぶ作品 古典的童話の映畫化」とされているものの内容は酷評に近い。アニメーション映画と比較した上で、こう書かれている。

所がこの映畫はアリスと夢の國の色々な動物や人物との個々の對話に重點が置かれてゐるから、そして一貫した冒險的な筋の面白みに欠けてゐるから、非常にテンポの遅い退屈なものになつてゐる。……如何にしてもこれはシリイ・シムフォニーの手がけるべき素材だ³⁰。(文中の「……」は、引用者による省略)

文中の「シリイ・シムフォニー」とは、ウォルト・ディズニーによる短篇アニメーション映画のシリーズのことである。東京・大阪の両朝日新聞には、映画の広告は見られるが、映画評はこれだけしかない。新聞・雑誌の、公開当時の映画評を見る限り、この映画が、むしろ国内では低い評価を与えられていたと思われる。実際、現在の日本では、パラマウント映画の『不思議の國のアリス』が国内で上映されたことを知るものは少ない。では、この映画は全く日本人に影響を与えずに忘れられてしまったのか？ 実はこの映画は、後世に少なくとも一つの点で大きな影響を及ぼしたと考えられる。それは、*Alice's*

*Adventures in Wonderland*の訳題についてであった。

訳題の運命

さて、訳題の問題について述べる前に、『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』二つの『アリス』物語が、当時の読者にとってどういう認識であったかを見てみたい。先述の『新映画』の記事の中で、清水は原作について、次のように書いている。

原作の『不思議の国のアリス』は、第一部「不思議の国のアリス」と第二部「鏡の裏の世界」の二部に分かれてゐる³¹。

また、『スタア』掲載の武山政信の記事でも、

「不思議の国のアリス」は最初出版されたものは、現在第一部として知られてゐる「不思議の国でアリスの逢つた冒険」”Alice’s adventures in wonderland”だけで、第二部の「鏡のうらでアリスの見たこと」”Through the Looking Glass and what Alice Found there”は續篇として後から書かれたものである³²。

とあり、二つの『アリス』物語が、当時一つの話の第一部、第二部として認識されていたことが判る。

独立した別の物語二編ではなく、一つの物語の第一部・第二部という認識がなぜ彼らの間にあったのか。一つの事実がこの理由を物語っていると思われる。昭和5年に楠山正雄の『アリス』の翻訳が出版されるのだが、この時、楠山は二つの物語を一冊にまとめ『アリスの夢』との題で出版している。その中で第一部「不思議の國」、第二部「鏡のうら」として、この二作を納めているのだ。楠山訳はその後昭和7年末に春陽堂文庫から『不思議の國』、昭和8年初めに『鏡の國』として二冊に分けて出されている。ただし、この二冊ともそれぞれサブタイトルとして「アリス物語」との題が記載されていて、春陽堂文庫においても、この二冊は一つの話の第一部・第二部という意識であったことが判る。当時、『アリス』物語を読もうとするものにとって、第一選択は楠山正雄訳であったと考えられる。また、映画やアメリカでの舞台版でも、この認識を裏書きするように一つの劇の中で『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』の二つを前後編のような形式で描いていることから、これら評者が二作品を一つの作としてごくごく自然に認識していたと考えられる。一方、『映画評論』掲載の來島雪夫の記事のみは原作を紹介しながらも2冊の『アリス』物語を別の作品であるとしている。

この映画の原作になつた「アリス」を書いたのが、一八六五年、も一つの原作「鏡を通して」”Through the Looking-Glass”を著したのが一八七一年である。その他、詩が數篇

ある。然し、ここに重要なのは「アリスの不思議の國の冒険」と「鏡を通して」の二篇である³³。

來島は原作を訳書ではなく原書で読んでいるから、この二つの物語が別の作品という認識を持っていたのだろう。

雑誌『映畫教育』の記事でも、「これは童話作家リュイス・キャロルの代表作『不思議の國』の映画化で³⁴」と、訳題を楠山訳に依っている。

さて、楠山訳により、二つの『アリス』物語が一つの話の第一部・第二部であるという認識ができたと考えた場合、清水の文の中で、一つ、奇妙なことに気づく。清水は、自身が楠山正雄の訳本しか読んでいないと述べているが、楠山の訳本で、戦前、『不思議の國のアリス』と題した訳本は存在しないのだ。楠山が題として使ったのは、『アリスの夢』『アリス物語』、あるいは『不思議の國』でしかない。『不思議の國のアリス』という題は、昭和5年に長沢才助の訳題に見ることができるが³⁵、清水の言葉からも明らかなように、彼は楠山訳以外を読んではいない。そうすると、清水はここで、映画の題をそのまま使用したと考えられる。

映画の訳題を、『キネマ旬報』で取り上げられた順に見てゆこう。この映画のクランクイン情報やその続報、そして、映画スチルにつけられた題などを見ると、昭和8年の時点では、この映画は『お伽の國のアリス』と呼ばれていたことが判る。ところが昭和9年1月1日号掲載の広告からは映画の題は、公開時の題でもある『不思議の國のアリス』へと変わる。映画の原題は、原作の題 *Alice's Adventures in Wonderland* ではなく、それを略した形である *Alice in Wonderland* である。そのことを考えると、「お伽の國」「不思議の國」という言葉は、映画の原題の *wonderland* の訳語として作られたものであり、清水のいう『不思議の國のアリス』の題も、映画の原題の直訳であったと考えられる。楠山訳の『不思議の國』、あるいは長沢の訳題である『不思議の國のアリス』も、この訳題選択に影響はあったろうが、映画『不思議の國のアリス』の訳題は、むしろ原題の直訳として生まれたと考えて差し支えないであろう。

大正末期から終戦直後までの『アリス』翻訳を表に掲げる。これを見て気づくのは、昭和9年に大戸喜一郎の再版と長沢才助の再版が出ていることだ。長沢については、もともとの題である『不思議の國のアリス』であるが、大戸訳も『不思議の國のアリス』となっていることは注目すべきである。これら二作の再版は、発売時期から考えて映画『不思議の國のアリス』の原作として発売されたことが明らかである。大戸訳の訳題の変更は、まさにそのことを裏書きしている。

原題の *Alice's Adventures in Wonderland* は、昭和4年に岩崎民平訳により『不思議の國のアリス』の題が与えられ、長沢が『不思議の國のアリス』とした。それが昭和5年であり、映画『不思議の國のアリス』が上映されたのが昭和9年、そして、その直後から *Alice's*

けではない。特に有名な作品で、この例が見受けられるのだ。それは、オールコットの小説 *Little Women* である。オールコットのこの物語は、『不思議の国のアリス』と同年の 1933 年にキャサリン・ヘプバーン主演で製作されている。日本へは、『不思議の国のアリス』に後れること半年、昭和 9 年の 10 月 4 日に、帝國劇場を封切館として公開された。その際にこの映画は『若草物語』という題を与えられている。その後、エリザベス・テイラーがエイミーを演じたリメイクも、日本での公開題名は『若草物語』であった。

『若草物語』は明治 39 年に『小婦人』の題で翻案が出され（北原秋圃訳）、大正 12 年に出された内山賢次による翻訳は『四少女』の題であった。ところが、映画が公開され、少女画報社から矢田津世子が出した抄訳は『若草物語』の題で、映画のスチル写真が納められている。昭和 9 年 11 月に中村作喜子が出した翻訳（春陽堂）では『四人姉妹』の題。この訳の中扉にも映画のスチルが使われた他、訳者後書きでは映画『若草物語』について触れられている。戦後も『四人の少女』『四人の姉妹』等の訳題があったが、最終的には映画の題名である『若草物語』に落ち着く³⁶。全く同時期に制作され、わずか半年遅れで日本で公開された *Little Women* と同じ現象が、*Little Women* に先だって *Alice's Adventures in Wonderland* にも起こったと考えるのは、あながち非常識な推測ではない。

昭和 9 年を最後に、『アリス』の翻訳は終戦まで出版されていない。戦後最初に出版された『アリス』の翻訳は、西条八十の『不思議の国』である。これは八十が大正期に訳した『鏡國めぐり』を改題して出版したものだ。原作が『鏡の国のアリス』であるのに、なぜ改題された訳書の題が『不思議の国』なのかも、上記経緯を考えれば理解できる。楠山の訳書の影響と、映画の影響の結果、二つの『アリス』物語は一つの話の前編・後編であるという認識が、日本の『アリス』の読者の間で定着したからであろう。日本では原作がほとんど読まれていなかったという当時の証言を考える場合、特にこの認識には、映画の影響が大きかったと考えて間違いない。昭和 21 年には雑誌『少年讀賣』に大佛次郎による『不思議国（ふしぎこく）のアリス』の連載が開始される（4 話にて連載終了）。楠山自身も昭和 23 年に『ふしぎの国のアリス』と改題して、自分の翻訳を再版する。これ以降、『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』の二作は別の作品として訳されるようになるが、*Alice's Adventures in Wonderland* の訳題は『不思議の国のアリス』『不思議な国のアリス』の二つに集約されてゆく。映画公開の前後で、訳題の傾向が全く変わってくるのだ。『不思議の国のアリス』という題は、長沢才助の訳題ではなく、むしろ映画の訳題がその後、本の題にも影響を及ぼしたと推測される。

ただ、昭和 9 年から昭和 21 年の間、『アリス』物語の翻訳が全くなかったことや、映画そのものが、現在では日本で公開されていたことすら忘れられていることを考えれば、映画の影響を大きく見積もり過ぎているのではないかと、との疑念もあるだろう。しかし、忘れてはいけないのは、当時の映画の興行システムのことである。この当時の映画は、大都市の封切館で上映された後、二番館、三番館と順繰りに上映していた。必ずしも封切り時に降に上映がなかったわけではないのだ。特にこの映画が子供向けの映画であることから、

昭和9年以降も、昭和16年12月8日の対米戦争開戦までは、上映の機会があったと考えられる。それに、この期間にも『不思議の国のアリス』という題が定着していたであろうことを示唆する事実が存在する。

探偵小説作家・小栗虫太郎は『黒死館殺人事件』が有名であるが、『アリス』に関連した作品もいくつか書いている。「二十世紀鉄仮面」(昭和11年)の章題と作中で『不思議国のアリス』を使っており、「方子と未起」においても章題に『不思議の国のアリス』、本文中で『不思議国のアリス』の言葉を使用している³⁷。小栗が長沢、あるいは岩崎の本を手にしていただ可能性もあるが、当時、楠山訳が一番読まれていたことを考えると、この時点で『不思議(の)国のアリス』という訳題が既に一般的になっていたと考えるのが自然であろう。

上記事実より、映画の訳題が本の題に影響を及ぼしたことは、まず妥当な推論ではないかと思われる。

まとめ

昭和9年に日本で公開された映画『不思議の國のアリス』に関する、当時の新聞・雑誌の記事を調査することで、以下のことが判明した。

- ・ 当時、原作がほとんど読まれていなかったこと
- ・ しかし、『不思議の国のアリス』を解釈するのに、フロイト流の手法を用いるといった方法が、既に日本でも知られていたこと。
- ・ 読まれていた原作の翻訳では、楠山正雄訳が一般的であったこと
- ・ 楠山訳の影響で、原作の読者では『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』の二作を一つの作品の第一部・第二部ととらえる考え方が広まっていたこと。その考え方が映画の構成を自然に受け入れる下地となっていたこと
- ・ ブロードウェイで上演された舞台版の『不思議の国のアリス』について、既に内容が日本でも知られていたこと
- ・ しかし、当時この映画は、決して高い評価を得ていなかったこと
- ・ 映画の題名『不思議の國のアリス』は、既存の訳書の題名を使用したというより、映画の原題 *Alice in Wonderland* の直訳として生まれた可能性が高いこと
- ・ この映画の訳題の影響で、現在の『不思議の国のアリス』という訳題が定着したこと

この映画は、当時、決して高い評価を得なかったが、昭和9年の段階では未だ読者の少なかった『不思議の国のアリス』という作品の受容に強い影響を与えた。その端的な例が、その後の原作の訳題が『不思議の国のアリス』へと収束したことである。映像メディアの存在が、活字メディアを読む行為を初めとする作品受容に大きな影響を及ぼした格好の例をこの映画『不思議の國のアリス』は示している。

謝辞

本稿をお読み下さり、ご助言下さった中島俊郎さん、高屋一成さん、木場田由利子さん

に感謝します。

引用・参考文献

- 1 清水俊二『映画字幕(スーパー)の作り方教えます』(昭和63年)東京・文藝春秋(文春文庫) pp.286-287
- 2 同、pp.392-396
- 3 清水俊二『字幕翻訳(スーパー)五十年』(昭和62年)東京・早川書房(ハヤカワ文庫)
- 4 清水俊二『映画字幕(スーパー)の作り方教えます』(昭和63年)東京・文藝春秋(文春文庫) pp.232-233
- 5 同、p.288
- 6 同、p.126
- 7 同、p.127
- 8 清水俊二「春の大作紹介 不思議の国のアリス」『新映画』昭和9年3月号、p.41
- 9 同、p.40
- 10 同、p.42
- 11 同、p.44
- 12 同、p.42
- 13 同、p.40
- 14 同、p.40
- 15 同、p.45
- 16 「海外通信」『キネマ旬報』昭和8年11月1日号、p.32
- 17 「海外通信」『キネマ旬報』昭和8年11月11日号、p.23
- 18 『キネマ旬報』昭和8年11月21日号
- 19 「十二月第四週・一月第一週 紐育主要館番組及成績調査」『キネマ旬報』昭和9年2月21日号、p.28
- 20 清水千代太「パラマウント映畫・不思議の国のアリス ”Alice in Wonderland”」『キネマ旬報』昭和9年3月1日号、p.83
- 21 同上
- 22 同上
- 23 村上久雄「不思議の国のアリス」『キネマ旬報』昭和9年4月21日号、p.69
- 24 『スタア』昭和9年2月上旬号
- 25 武山政信「『不思議の国のアリス』が出来るまで」『スタア』昭和9年3月上旬号、p.4
- 26 來島雪夫「不思議の国のアリス」『映画評論』第11巻第4号(昭和9年) p.80
- 27 同、p.81
- 28 同上
- 29 飯島正「不思議な国のスター」『大阪朝日新聞』昭和9年3月4日、第4面
- 30 「新映畫評 不思議の国のアリス」『東京朝日新聞』昭和9年3月20日、第5面
- 31 清水俊二「春の大作紹介 不思議の国のアリス」『新映画』昭和9年3月号、p.41
- 32 武山政信「『不思議の国のアリス』が出来るまで」『スタア』昭和9年3月上旬号、p.4
- 33 來島雪夫「不思議の国のアリス」『映画評論』第11巻第4号(昭和9年) p.81
- 34 「不思議の國(原文ママ)アリス」誌上映畫『映畫教育』昭和9年4月号(第七十四輯)
- 35 門馬義幸「『不思議の国のアリス』書名再考」『MISCHMASCH』(6)5-10, 2003年
- 36 西村醇子「児童文学史から見た『若草物語』」高田賢一編著『シリーズ もっと知りたい名作の世界 若草物語』(平成17年)東京・ミネルヴァ書房、pp.154-156
- 37 門馬義幸「『不思議の国のアリス』と『不思議な国のアリス』」『MISCHMASCH』(7)6-10, 2004年